

ご挨拶

徳島大学 産学官連携推進部

副部長(教授)

織田 聡



産学官連携に関連した近年の特徴的な潮流を一言で表すキーワードとしてオープンイノベーションという言葉があります。オープンイノベーションは外部の開発力を活用したり、知的財産権を他社に使用させたりすることで革新的なビジネスモデルなどを生み出し利益を得る考え方をいい、カリフォルニア大学のヘンリー・チェスブロウ教授がハーバード・ビジネス・スクール在職中の2003年に提唱しました。それまでの企業の基本的なスタンスは社内で研究開発を完結するクローズドイノベーションが主流でした。しかし、製品のライフサイクルの短縮化やR&D投資を拡大しても新製品創出による回収率が思うように増加していないという現状から、スピードと精度を兼ね備えたイノベーション創出モデルとして、大学等のアイデアを広く集め活かす仕組みであるオープンイノベーションに注目が集まるのは自然の流れであったと思います。

ここで注意しなければいけないのは、せっかく大学のいいアイデアを企業が取り入れても、実際に製品化されるには、さまざまな壁があるということです。これを表すのによく使われるのは、アイデア・基礎研究から実用化を目指した研究までの間の壁である「魔の川」、実用化研究から製品化までの間の壁である「死の谷」、そして、製品が市場による淘汰を受けて生き残る際の壁である「ダーウィンの海」という3つの言葉であり、基礎研究から製品化までの各ステップに潜むリスクを端的に表した表現です。実際に製品化を試みたことのある方は、一度はこれらの壁を意識された経験があると思います。

この壁を乗り越えるための戦略が必要となりますが、一番重要なのは、アイデアの提供者である研究者と実用化を目指す企業の双方が製品を市場に出すという共通の目的の下、きめの細かい連携を行うことにより、うまく壁を乗り越える成功確率を上げることであると考えます。徳島大学において、これを可能とする研究者と企業との連携の橋渡しをするのが産学官連携推進部であり、具体的には、大学における知的財産の確保と利用、共同研究や受託研究の管理、そして外部資金の獲得のための情報収集と発信等の多様な業務を行っています。こうした、活動を通じて、研究者と企業がうまく連携できる流れを構築するのが大きな役割です。産学官連携推進部がこの役割を果たし、実用化に向けた橋渡しがうまくいけば、それぞれの分野で特徴のある研究活動を行っている徳島大学は、優れた研究成果を製品化することにより、社会貢献という点でも大きく飛躍すると確信しています。そして、結果として、研究者、大学、企業、そして地域社会のすべてが発展できるWin-Winの関係を構築できると期待しています。

また、既にご存じの方も多いかと思いますが、徳島大学を含む四国地区の国立5大学は、産学官連携、AO入試、および e-learning の3事業を協力して進めることになりました。この中で、産学官連携事業は徳島大学が基幹大学となり、産学官連携部門共通業務の統合・一元化をはかり、関連業務の効率化や高度化を目指します。複数の大学が協力して実施する産学官連携事業がうまく機能すれば、そのスケールメリットによりオープンイノベーションの推進と実用化の成功確率向上も期待できます。産学官連携推進部はこの事業とも連携して業務を進めていきます。

このような状況を踏まえ、産学官連携推進部は気持ちを新たに活動を行い、研究者をきめ細かくサポートしていきたいと考えていますので、今後共、よろしくご願ひ申し上げます。

